

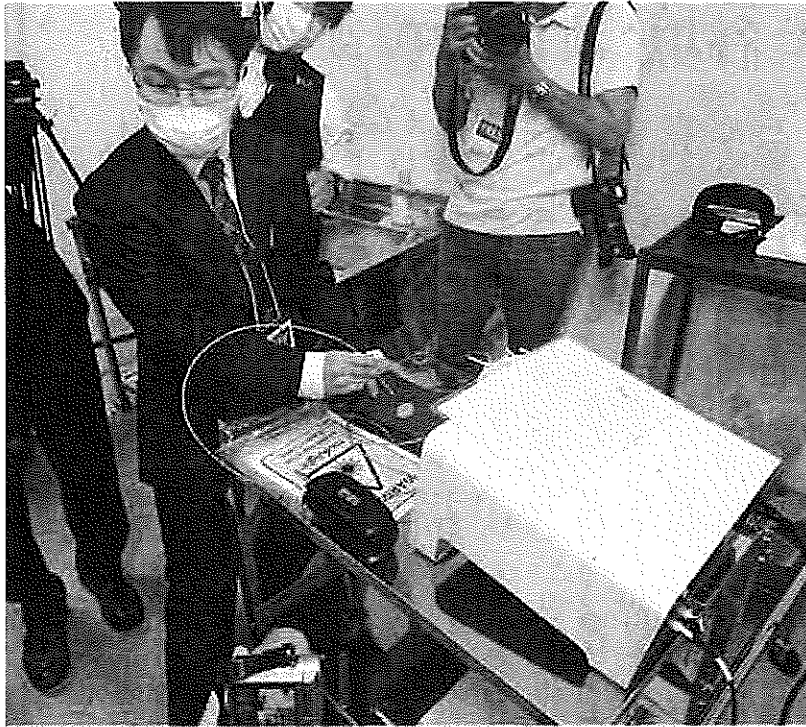
地域ニュース

第5のがん治療 研究推進

関西医大に日本初の拠点

光免疫療法

関西医科大学(枚方市)に今月、がん細胞を破壊して免疫を活性化させる「光免疫療法」を専門に研究する日本初の「光免疫医学研究所」が開設された。手術や抗がん剤などに比べ、副作用が少ない「第5のがん治療」として世界的に期待される同療法の生みの親、小林久隆特別教授が所長に就任し、「基礎研究と(付属病院などの)臨床研究の両輪で光免疫療法の効果を高め、治療を待つかん患者たちに役立ちたい」と話している。



レーザーを使った実験室のデモンストレーション

同療法は光に反応する薬を点滴してがん細胞と結合させ、人体に無害な近赤外線を照射してがん細胞だけを瞬時に破壊。副作用が少なく、免疫システムを劇的に活性化させて再発予防の



光免疫療法の展望を語る小林久隆所長(枚方市の関西医科大学)



光免疫医学研究所が開設された関西医科大学(右)。奥は付属病院

効果も期待される新しい治療法だ。

アメリカ国立衛生研究所(NIH)・国立がん研究所(NCI)で2001年から主任研究員を務める小林所長が開発。バラク・オバマ大統領が12年の一般教書演説で「世界に誇る偉大な研究成果」と紹介したことで知られている。光免疫療法の論文はNIH長官賞などを受賞し、ノーベル賞候補になる可能性もあるとみられている。

世界各国で治験が進む中、20年9月には世界に先駆けて日本で司康去の斬撃

が承認され、現在、関西医科大学付属病院を含む約60の医療機関で、手術が難しく局所再発した頭頸部(首より上)がんの保険治療が進められている。

小林所長は記者会見で「アメリカの私のラボでは大学や企業など20人以上の日本の研究者が光免疫療法を研究して帰国しており、国内に研究と臨床の拠点ができれば、そのネットワークが生かされると考えた」と説明。

今後については「光免疫療法は手術や化学、放射線治療なども併用できる。新薬開発も含め、10年以内

に頭頸部だけでなく約8割のがんに対応できるようにしたい」と語った。研究所は同大学枚方キャンパスの4階フロアなど約1500平方メートルに最新機器や実験室を整備し、免疫や基礎開発などの専門家ら30人で運営する。山下敏夫理事長は「本格的な研究所の設立は10年来の念願だった。日本における光免疫療法を中心研究拠点にした」と話している。